
憧れの彼

今村架純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憧れの彼

【Zコード】

N1133A

【作者名】

今村架純

【あらすじ】

主人公の実架^{みか}は恋をした。その相手は生徒会長。しかし、会長の気になつている人は、美人の生徒会副会長の春奈^{はるな}先輩。果たして、実架は両思いになることができるのか？

第一章『あなたが好き』

私は恋がしたい

だからと言つて、誰でも良い訳じやない。

私のことだけを見てくれて、私のことだけを愛してくれる
そんな人はいないつて思うでしょ？

私もいないつて思つてた。

誰もが 恋をして傷ついても、また再び恋をする。

でも、私は一生の内で愛すのは一人だけで良い、って思つてた。
そんな私の前に彼が現れた

まさに理想の男の子。彼の名は、長瀬蓮。

彼と両思いになれたら良いな？

私は星野実架。

勉強も体育も同じぐらいできる、平凡な高校生。

彼氏いない暦、16年。自分で言つてて、むなしくなる。

「実架、会長のあいさつだよ」

私に話しかけてきたのは、親友の綾乃。

いつも明るくて、クラスの中心的存在。

背が高くて、とっても美人な彼女は結構もてる。

「明日から体育祭の練習を行うことになるだろ？」

真剣に取り組み、みんなで協力して頑張りましょ！」

朝会の壇上で話をしている彼は、生徒会長の長瀬蓮。

彼はクールでポーカーフェイス。

運動も出来るし、成績は常に学年トップ。

女子なら誰でも憧れている存在だ。

そして私も会長を見るたびに、心臓の鼓動が高くなる。

美沙に教えてもらつた。この気持ちが恋だと。

だけど会長は誰に対しても、笑顔を見せたりはしない。

初対面の相手にはきっと、会長が冷たい人だと勘違いしてしまうだろ？

でも、私は会長が優しいことを知っている。

会長に初めて会ったのは、4月6日。

この高校の始業式の日だ。

初めてこの学校に来た私は、体育館の場所が分からなかつた。

「やばい！！後、5分で始まっちゃう」

時間との戦いで慌てていた私は、階段を踏み外して落ちてしまった。

「痛い…」

泣きが入るほど痛みだつた。

立とうとすると、よろけてしまつた。

どうやら、足をくじいてしまつたようだ。

「大丈夫か？」

声のした方を見ると、男子生徒が立つていた。

「は、はい…！」

初めての学校なので緊張していた私は、おもわず大声で返事してしまつた。

「新入生だな。ほら、体育館に行くぞ」

彼は私の手をとつて立たせてくれた。

それから私は足の痛みを我慢しながら、彼の後ろをついて行つた。会話もなしに、彼はささつと歩いて行く。

校舎を抜けると、体育館に着いた。

「あ、あの どうもありがとうございます」

「いえ、別に」

彼はどこかそつけない。

「私は星野実架です。貴方は？」

「俺は早瀬蓮。生徒会長をやつている」

この人が生徒会長だなんてー。びっくりだ。

「生徒会長だつたんですかあー」

「意外かつ？」

会長は笑いもせず、そう尋ねてきた。

「い、いえ。そう言つ意味じゃなくて

この学校に来て、一番最初にあつたのが生徒会長。

そう思つとなんか、びっくりです！！」

私が言つと、会長は不思議そうな顔をした。

私はいつたい、何を言つてるのだらう…（汗

「おまえ、面白い奴だな」

そう言つた会長は笑つていた。

その笑顔に私は惚れてしまったのかもしない。

とにかく、会長が好きになつたのは始業式の日からだ。たつた数分でも私にとつては忘れられない日となつた。

私はあくびをしながら、バスが来るのを待つっていた。

明日から体育祭の練習が始まる。

私はリレーの選手に選ばれていた。

本番はきっと、緊張するだらう…。

「はあ」

思わずため息を付いた。朝練もあるし、今日は早く寝よう。最近会長のことを考えてばかりで、夜も眠れない。

乙女の悩みと言つ奴だ。

「ため息なんかついて、おまえらしくもない

「えつ…」

声の主は憧れの会長だった。

「いつから隣に居たんですか？」

「いや、今来たとこ。」

バス停で会長と会えるなんてラッキー。神様に感謝だ。

「なんか、悩みもあるのか？」

「別に悩みなんてありませんよー」

「そう、なら良いけど」

「もしかして、心配してくれてるんですか？」

私はちょっと期待しながら、尋ねた。

「別に。でも、おまえが暗いと俺まで暗くなる」

「これはどういう意味だろ？」

「もしかして告白！？そんなこと、あるわけないか

「いや 恋の悩みですよ」

「…おまえにも好きな奴いるのか？」

そりや、そうだよ。私にだつて好きな人ぐらい
でも、本人はまったく気づいて無いんだよね。

「蓮会長だつて好きな人ぐらい居るでしょ？」

「さあ？居るかもしないし、いないかもしない」
なんだよ 勇気を振り絞つて聞いたのに…
はつきり、してよ！！

「どつちですか？」

好きな人を聞くチャンスだ。でも、聞くのが怖い。

「自分でも分からん。気になる奴はいるけど、好きな奴かは分から
ない」

「誰？」

私はそう尋ねた。

気になるつてことは もう好きつてことだよ、会長。
貴方も恋をしてるんですね…。

その相手が私だつたら良いのに。

私は貴方を一生愛すと誓えるわ

「おまえが言つたら教えてやるよ」

はつ？私が本当のことを言えるわけないでしょ？
まして、蓮会長の前で…！

私にここで告白しろ、って言つの？

無理だよ、少なくとも今私はそんな勇気ないし。

「え、えつと クラスの野村隼人」

「こうなつたら、適当に言えー！！」

彼は顔が良くて明るい、サッカー部のエース。隼人とは昔から、喧嘩友達である。

「… そうか。あういう奴が好みなんだな」「え、好みって言うか」

「ごもる、私。隼人は私の恋愛対象じゃないし。隼人のことを理想の男子だ って言っている女子は居るけど、私にはただの馬鹿にしか見えない。」

「いや、隼人とは昔からのクサレ縁でして」

「私ったら何を言っているんだ? 馬鹿じゃない。まだ秘密にしておいた方が良かつたかも……。」

「野村は結構、もてるぞ。」

生徒会の奴等でも憧れている女子は居る。

まあ、頑張れ」

応援されても全然、嬉しくないんだけど? 「れ、蓮会長の気になる人は?」

いや 聞きたくない。でも、聞きたい 。

しつかりするんだ、自分!!

「俺は…副会長の竹内春奈」

はあ…。聞くんじゃなかつた。

竹内春奈 彼女はしつかり者で女子からも男子からも好かれている。

何よりも美少女だつ!!

私とは比べたら、『月とスッポン』だし。

神様は私にチャンスを与えてくれる気は無いみたいだ 。

「おい、どうした?」

ぼつとしている、私に蓮会長は心配そうに尋ねる。

そんな顔しないで。私を見ないで

「わ、私は歩いて帰ります。さよなら」

そう言って、会長の顔を見る余裕もなく走った。

バス停から遠のいていく。

恋をすると、何故こんなにも苦しいの？

会長と両思いになれるなら、どんなことでもする。

会長が一日でも私のことだけを、見てくれたなら死んでも良い。そう願うのは罪ですか？

「そつか、春奈先輩か」

綾乃是黙つて私の話を聞いてくれた。

綾乃是始めての高校で私に声を掛けてくれた。

不安と緊張の入り混じっていた私に、「友達にならう」って言つてくれた。

彼女は私にとつての天使だ。

「うん。聞いたのは良いけど、立ち直れなくてね」

あれから歩いて家に帰つて、夕食も食べずに布団に入つた。眠れずに、泣いた。

何故会長が春奈先輩のことを好き 、 って言つたぐらいでこんなに苦しいのだろう。

「でも、会長は好きかは分からない！ ！ って言つたんでしょう？ なら、まだチャンスがあるんじゃない？」

春奈先輩はただの憧れの人かもしれないし

「えつ？」

「元気出しても、実架。憧れと好きな人は違うわよ。

憧れの人は 理想の人よ。例えば、金持ちの人と結婚したい。これは、単なる理想に過ぎないのよ。

でも、実架が会長を好きつてのは理想じやないでしょ？ 心から、好きなんでしょう？」

綾乃の言葉で少し元気が出た気がした。

「心から好きなら、会長を追いかけなきや！ ！」

そして、春奈先輩はただの理想の人だと気づかせてあげなよ

彼女は笑顔でそう言つた。

「…私、頑張つてみるよ。ありがと」
綾乃、いつも私に勇気と力をくれてありがとう。
貴方が居なければ、私は暗闇をずっと迷つてた。
大きさかもしれないけど、本当にそう思うんだ。
それぐらい、会長は大切な人だから。

「おい、実架 会長がお呼びだぜ」
昼休み、隼人が私にそう言つた。

えー会長が？

「廊下に居るわよ、早く言つておいで」
綾乃は私をせかすように言つた。

ただ立ち止まつていてるだけでは前に進めない。

「行つて来る」

会長は何のようかな？とりあえず、昨日のことを謝らないと。
あんな変な別れ方、会長も気にしてるかも知れない
「よつ、今時間あるか？」

「はい」

会長とならんで歩く。

あ～背が高いな。私はそんなことを考えていた。
屋上には人もいなくて、話すには絶好の場所だつた。

「あの 会長、昨日はすみませんでした」

「俺こそ、ごめんな」

「えつ？」

突然、蓮会長に謝られたので私はびっくりした。

何で、会長が謝るの？別に会長は悪くないよ。

「俺、おまえの気持ちを考えずに

野村はもてるとか…言つた。

おまえはそれで、嫌な思いをしたんだろ？悪かった

違うし！私は会長の好きな人を聞いてショックを受けただけ。

そつ、ちょっと困るじゃつただけ。

でも私はそんなことじや、めげないからね?

蓮会長を好き、つて気持ちを持ち続けるのは私の自由でしょ、う?

「いえ、大丈夫です。

本当に昨日のことは気にしないで下せー」

「でも…」

「お互い、頑張りましょ、う」

私は絶対に貴方を振り向かせて見せるから。
覚悟しておいてよーー!

第一章『体育祭の練習』

「疲れたー」

この広い校庭を一時間も走り続ければ誰でも疲れるであろう。私は体育祭を優勝するため、必死で練習していた。リレーの選手に選ばれたからには、ちゃんと練習しなければみんなの期待に答えなければ

「実架、頑張ってるな」

幼馴染の隼人が私に声を掛けってきた。

「そりやあ、優勝目指してるからね」

「そつか、そつか。俺もガンバローー」

私の数倍も隼人は練習して、サッカー部の優勝を目指しているじゃないか。

あんたは少しぐらい休んだ方が良いぐらいなのに。
でもそうやって、頑張っている隼人を見るのは好きだ。
幼馴染であることが嬉しく思えてくる。

努力しない人間なんてダメ人間だ

だから、私は体育祭も 恋愛も精一杯頑張つてみせる。

「何見てるの蓮？」

春奈は尋ねた。

蓮はさつき程から窓の外、校庭を見ている。

「体育祭の練習頑張つてるな」

「そうだね。私たちは今年最後だし頑張らないとね」

「ああ」

「あの子 星野実架ちゃんだけ?

「この一週間、一度も練習をサボらずにやつて偉いね」

春奈の言葉に蓮はうなづいた。

翌日

「ねえー、実架。今日ぐらいは練習休んだ方が良いよ？」

綾乃是心配して言った。

私の頭はぼ～としている。

さつき熱を測つたら、九十もあった。

でもリレーは私一人でも欠ければ、練習にはならない。

「大丈夫だつて」

無理に笑顔をつくる。大丈夫だよ、綾乃。

私は休む暇なんてないんだ。

「…まあ、実架は言い出したら聞かないから好きにしたら」

「うん、じゃあ行くね」

私はそう言つて、体育館の更衣室に向かう。

階段を下りながら思つた。

もしかしたら、本当にやばいかもしれない。

なんかこの階段が左右に動いているようにみえる。

実際には動いてはいない といつ」とは、私自身がふらふらしているんだ。

「やばい…」

私はそう言つて階段から落ちるのを覚悟した。
そして足が階段から離れた。

あれ！？案外、痛くないな

「おい、大丈夫か？」

聞き覚えのある声に私はびっくりする。
階段を落ちたことに間違いは無かつた。

「えつ？」

私は蓮会長に抱かれていた。

「ええええええ…」

私の頭は混乱していた。

熱が出てただでさえ考えられないのに、この状況ときた。

「俺が階段を上ろうとしたら、おまえがいきなり落ちてきた」

「「」、「」めんなさい」

「怪我は無い？」

私は目を開けているのもつらくな。

そして意識を失った。

「」はどこ？ 何か柔らかい物の上にいる

私が目を開けると、そこは見慣れた私の部屋だった。

どうやら、ベッドで眠つていたらしい。

熱がまだあるのか、頭がくらくらする。

「待てよ？」

私は考えた。階段から落ちた後…ビリしたつけ？ 必死に思い出す。

辿り着いた結論は…蓮会長に助けられたといつ」と。

「嘘つ…！」

これが夢であれば良い。

「お母さん、お母さん…！」

「何よ？」

私の部屋へとお母さんが入つてきた。

「私…どうした？」

「熱がまだあるでしょ、静かにしてなさい。

実架の彼氏がかついで家まで送つてくれたわよ。

それにしても、貴方馬鹿ねえー。なんで階段から落ちるの？ 熱があるんだつたら大人しく家に帰つてくれれば良かつたのに

私の彼氏？ 彼氏？ 彼氏…？ 誰それ？

それつて、やっぱ会長のことだよね？

「彼氏じゃないし」

「何言つてるのー。普通彼氏じゃなかつたら、家まで送つてくれな

いつて。

保健室に連れて行くだけよ。

それにもしても、かつこ良い子だったわ～

実架も年上の良い彼氏をもつて お母さんは嬉しいわ

「黙つて、出て行つて！！」

私はパニックだった。

母を部屋の外に無理矢理出すと、頭の中を整理した。

「と、とりあえず会長に電話しよう」

頑張れ、落ち着け。そう言つて、携帯電話を取つた。つて、私は会長の電話番号なんて知らないし……

せめて、メールアドレスだけでも聞いとけば良かつた。

今更、後悔してもどうしようもない。

「明日、お礼を言おう……」

そう言つて、私は再び田を閉じた。

『今日一日休めば？』 そう母に言われても私は無理に家を出てきた。昨日練習を休んでしまつた分、今日は人一倍頑張ろう。

私はそう思つていた。

そして 会長にお礼を言おう。

家までかついで来てくれたなんて……私、重かつただろうな（汗） そう思いながら、生徒会室に向かつた。

「トントン」

ドアをノックすると、春奈先輩が出てきた。

「えつと、蓮会長いますか？」

「今、中庭に行つたわよ」

「あ、ありがとうございます」

春奈先輩は本当に綺麗だなあ～

「ねえ」

立ち去るうとした私を春奈先輩は呼び止めた。

「何でしうか？」

私は振り返り、尋ねた。

「蓮と付き合つてるの？」

突然、そう尋ねられ戸惑う私

いきなり、何なんだ？

「何で、そんなこと聞くのですか？」

「興味があつただけよ」

いつたい、どんな興味があるの？

もしかしたら…春奈先輩も会長のことが好きなのかもしれない。
つてことは、両思いじゃん

「付き合つてません」

私の片思いなんだよ…

そんなこと、春奈先輩にだけは尋ねられたくなかった。

「そう。変なこと聞いてごめんね」

春奈先輩は言った。

謝るのなら最初から、聞かなければいいじゃない。

私は心の中で文句を言つて、中庭に向かつた。

分からない 何故、春奈先輩は私にあんなことを尋ねたのだ？

春奈先輩は蓮会長のことについて思つてゐるのだろう？

「す、好きです」

そんな声が聞こえてきたので私は戸惑つた。

いつたい、誰が誰に告白しているんだ？

好奇心に誘われ、私は中庭の方を見る。

「会長のことが好きなんです」

蓮会長に告白している

「じめん」

そう言つて会長はあつさつと断つてしまつた。

結構、可愛い子なのに。スタイルだつて抜群だ。

「じゃあ、キスしてください。」

キスしてくれたら、もう一度と会長に近づきませんから

「えつ！ …キ、キス！ …

なんて大胆なことを言つんだ。

「馬鹿なこと言つな」

「お願いします」

私はその場を離れようと思つても足が動いてくれない。

見てはいけないんだ

でも、自分の好奇心には勝てない。

「いい加減しろ！ …」

「嫌つ」

女の子はさう言つて、蓮会長に抱きついた。

私は見ていることしかできない。

会長は困つたような顔をしていた。

「俺はおまえの思つてゐるような奴ぢやない

「でも…好き」

女の子は会長から離れようともしなかった。
そんな彼女を会長は無理矢理突き飛ばした。

「本当に俺を怒らせたようだな？」

「俺は優等生でもなんでもないんだよーー！」

誰とも付き合わない、深く関わらない。

それが俺のモットーだ。

仲の良い友達なんていらない、彼女なんていらない。
おまえが好きだと言つたのは、俺の仮の姿だ。

本当の俺を知らないくせに。消えろ、うざい！」

女の子は会長の言葉に涙を流しながら、駆け足でその場を後にした。
会長が『消えろ、うざいーーー』と発したことにびっくりした。
私は会長がそんなことを言つとは思つてなかつた。

「おー、誰か居るのか？」

そう言つて、会長はこっちにせつて来る。

「あー、星野。全部、聞いていたのか？」

「…はい」

「そうか」

会長はさびしい表情をした。

「私も会長が好きでした」

何を言つているんだ、私？それでも口が止まらない。

「でも、私もさつきの子と一緒に

会長の仮の姿を好きだったのかもしだれません。

あの女の子を傷付けるような言葉を、会長が言つたなんて信じられないません。

だけど、そんな言葉を聞いた今でも、会長が好きなんです。
嫌いになんてなれない」

そして、私は全力でその場から逃げた。
つに言つてしまつた。

いずれかは告白しなければならぬ、と思っていた。
でも、こんな形で告白したくは無かつた。

私は会長の何を見てたのだろう?

会長は裏表がある人だったのか

なんで、会長……。入学式の日に見させてくれたあの笑顔も仮の姿だと

と言つのですか?

「おい、どうした?」

顔を上げると隼人が居た。

「好きな人に振られたんだよ……」

そう言つた私の頭を隼人は撫でてくれた。

「そつか、そいつ見る目ないな」

そう言つて彼は私の隣に座つた。

「私、綾乃みたく可愛くないし。仕方ないよ」

「おまえは、可愛いよ」

「えつ?」

隼人の口からそんな言葉が聞けるとは思つてなかつた。

「おまえは俺が守つてやる。寂しかつたら、いつでも俺を頼れ。

俺はお前が好きだ」

顔が暑くなるのを感じた。

隼人、何言つてるの ?冗談きついし(汗

「嘘じやないよ」

隼人はそう言つて私を抱きしめた。

「ちつ」

二人の様子を影から見ていた蓮はおもわず舌打ちをした。

「星野、おまえには野村がぴつたりだよ」

そう言つて、蓮は苦笑をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1133a/>

憧れの彼

2010年10月21日23時41分発行